

学生や教員，職員が望む大学授業に関する研究（I）

—— 3者に対するアンケート調査から・総論編 ——

田 鈴 岩 古 竹
実 木 本 谷 原
一 次 卓
潔 剛 郎 郎 真

学生や教員，職員が望む大学授業に関する研究 (I)

—— 3者に対するアンケート調査から・総論編 ——

田 実 潔
 鈴木 剛
 岩本 一郎
 古谷 次郎
 竹原 卓真

目次

- I. はじめに
- II. 目的
- III. 方法
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. 結語

I. はじめに

2008年から改正された大学設置基準では、学士課程においてもFDの義務化が明文化されたことは周知の事実である。これに対して夏目(2008)は、FDの実施を促進する条件を列挙しているが、そのほとんどは大学授業あるいは学生教育への言及が多くを占めており、大学教員の授業改善や教育内容検討は避けて通れない課題である、と指摘している。また、文部科学省も高等教育局長名で通知を出し(2007)、「各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。」とし、FDの義務化は教員個人ではなく大学義務としている。これに対して青野(2008)は、「授業の内容及び方法の改善」の重要性を指摘し、学生による授業評価やカリキュラム評

価を抜きには行えない、と学生授業評価の再検討を提言しているが、大学授業そのものについての言及はしていない。昨今のFD研究では、大学構成員全員によるFD共同体の成立が一つの流れになっている(林2006, 田中2006)が、それは特別な共同体の成立を目指すのではなく、「FDの日常性」つまり大学教員の日々の授業活動レベルに出発点を置き、授業研究と授業改善を念頭に置いたものとなっている(絹川2008)。

一方、大学授業改善については、授業方法論を巡る議論(溝上2002)や学生の参加を促すにとどまらず学生と構築する授業の開発の必要性(岡部2002)、教えることから学びの支援へとシフトチェンジする必要性(伊藤2008)等の指摘がなされている。また、教師の資質論や教師論としての指摘として、久保ら(2008)は、TA(Teachig Award)賞受賞教員へのインタビューから優秀教員の資質を明らかにしており、私立大学情報教育協会(2008)は優れた授業を評価・顕彰する制度の導入や教員自身による教育諸能力の自己点検の必要性を指摘している。その他にも教員の授業スキルアップに関する原則論的な提示については、Davis(1993)やMcKeachie(1999)、草取(1995)、池田ら(2001)などがある。

キーワード：FD，授業に関するアンケート調査，授業改善

FD研究の中でも授業改善に関わる研究は喫緊の課題となっているが、学生による授業評価を授業改善に反映させる試みはほとんどみられず(宇佐美1999, 2004),むしろ学会等でも学生による授業評価の有効性を否定する研究が多い(吉田2010, 松谷ら2005, 安岡2007, 田実・竹原2008)。それに対して,田実(2008a),田実・竹原(2009),田実・竹原・鈴木・岩本・古谷(2010)は,隔年で実施されている北星学園大学の学生による授業評価の結果を統計的に詳細に分析比較し,授業評価そのものの妥当性を検討している。それによると,学生による評価が低い授業については,2~4年後の評価において有意に評価が改善されることが示され,学生による授業評価が教員の授業改善に有効に寄与していることがデータ上明確になった。しかし,高い評価を得た授業については,逆に評価を有意に下げる傾向があり,総体的に学生による授業評価が教員の授業改善に有効であるとは結論できなかった。このことは,授業評価の妥当性を検討する必要性を改めて示しているとともに,大学授業に対する学生や教員の意識の違い,特に高い評価を受けた授業に対する学生と教員の意識の違いを示していると思われる。

以上の先行研究から,大学における授業改善を進めるためには,従来行われている学生による授業評価では不十分であり,授業改善に直結する評価項目の検討が必要となっている。同時に,大学の授業についても,学生や教員のもつ大学授業に対する意識の差を明確にし,特に学生が求める大学授業とは何か,を明らかにすることがのぞまれている。

II. 目 的

そこで,本研究では田実(2008b)が用いた大学授業イメージに関する調査用紙により,学生と大学教員,および大学職員を対象とし

てアンケート調査を行った。この調査により,大学授業に対する3者の意識を分析し,大学授業に対する意識の差を明らかにすることを目的としている。差を明らかにすることで,学生が大学に求める授業意識を浮き彫りにし,ひいては教員が授業改善に直結するような学生による授業評価項目を模索することができると考えている。学生と教員相互理解に基づく授業改善しやすい授業評価作成に向けて知見を得ることとする。

大学職員を対象としたのは,FD研究は教員と学生だけを対象しているのではなく,大学を構成しているすべての構成員を対象としている(林2006, 田中2006),との考え方によるものである。

III. 方 法

田実(2008b)の大学授業イメージに関する調査用紙を学生と教員,職員に配布し行った。調査項目は全部で66項目あり,それぞれについて,そう思う-どちらかといえばそう思う-どちらともいえない-どちらかといえばそう思わない-そう思わない,の5件法で答える質問であり,それぞれ4点-3点-2点-1点-0点の評価得点を付加している。フェースシートには,性別,学年(教員と職員の場合は北星での就業年数),学部学科(学生のみ)を記入するようになっており,個人情報につながるような質問や個人が特定される可能性のある質問は設定していない。

学生への調査は,授業内で行い3学部8学科の4学年からほぼ均等に回答が得られるように,学年指定の授業を中心に選択し,担当教員に配布と回収を依頼した。得られた回答数は,文学部の英文学科222名と心理応用コミュニケーション学科226名,経済学部の経済学科330名と経済情報学科133名と経済法学科180名,社会福祉学部の福祉臨床学科300名と福祉計画学科282名と福祉心理学科259名の

合計1932名分である。教員と職員にはそれぞれ個別に調査協力をし、回収箱に投函してもらった。教員からの回収数は71名分(回収率56.8%)、職員からの回収数は75名分(回収率65.8%)であった。分析に用いたソフトはWindows版SPSSである。

1. 分析 I

得られた全データ2088名分を因子分析にかけ、大学授業に対する全体の傾向を調べた(プロマックス回転)。因子負荷の絶対値0.30をカットポイントとし、複数の因子に負荷する項目やどの因子にも負荷しない項目をモニターしながら因子分析を繰り返し、最終的に7因子を抽出した。

2. 分析 II

分析 I により得られた7因子について、学

生と教員あるいは職員との間で、大学授業に関する意識の違いについて比較検討した。各因子ごとに、学生、教員、職員の3要因についての一元配置の分散分析を行った。

IV. 結 果

分析 I の結果を、Table 1 に示した。抽出された因子は、それぞれ第1因子を『授業内容の充実因子』、第2因子を『学生参加型授業因子』、第3因子を『教員の熱意やコミュニケーションスキル因子』、第4因子を『教員の親和性因子』、第5因子を『学生の受講態度因子』、第6因子を『学生への配慮因子』、第7因子を『授業の規律因子』と命名した。

分析 II の結果について、分散分析の結果を

Table 1 全体の因子分析結果 (プロマックス回転)

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
Q69: 伝えたい内容が明確である授業がよい	0.789	-0.031	0.072	-0.013	0.048	-0.065	-0.189
Q53: 目的・目標の明確な授業がよい	0.788	-0.036	-0.056	0.074	-0.035	-0.042	-0.087
Q62: 論点が整理されている授業がよい	0.754	-0.040	0.084	-0.144	0.000	-0.013	-0.076
Q72: 話が一貫している(飛躍の無い)授業がよい	0.478	-0.122	-0.082	0.036	0.084	-0.032	0.056
Q58: メリハリのある授業がよい	0.471	0.031	0.116	-0.072	0.025	0.158	0.073
Q74: リアリティのある身近な事象を扱う授業がよい	0.449	0.006	0.113	-0.015	0.005	0.109	-0.019
Q24: 多角的な視点のある授業がよい	0.396	0.086	0.177	-0.040	-0.022	-0.073	0.093
Q56: 授業への参加を実感できる授業がよい	0.381	0.220	0.010	0.118	0.003	0.051	-0.030
Q41: 評価基準が明確な授業がよい	0.361	-0.159	0.078	-0.006	0.032	0.069	0.131
Q54: 責任感を感じさせる授業がよい	0.359	0.097	-0.198	0.170	-0.048	0.042	0.239
Q04: ディスカッションのある授業がよい	-0.073	0.862	-0.048	-0.147	0.022	-0.019	-0.048
Q01: 学生が参加する双方向な授業がよい	-0.113	0.853	0.088	0.029	0.017	0.040	-0.261
Q66: 受講生同士で刺激を受け合う授業がよい	0.135	0.627	-0.190	0.127	-0.040	0.096	-0.033
Q07: アクティビティのある活動的な授業がよい	-0.182	0.546	0.150	0.056	0.094	0.002	-0.136
Q46: 学生に考えさせる授業がよい	0.250	0.507	0.039	-0.210	-0.069	-0.080	0.158
Q17: 少人数で質問しやすい授業がよい	-0.112	0.499	0.036	-0.127	0.016	0.049	0.188
Q65: 学生の発言、アクティビティを正当に評価する	0.238	0.460	-0.082	0.114	-0.037	-0.005	-0.047
Q29: 教員と学生の一体感のある授業がよい	0.004	0.323	0.241	0.241	-0.002	-0.004	0.020
Q12: 興味を引く話術のある授業がよい	-0.039	-0.001	0.800	-0.057	-0.024	-0.001	0.016
Q15: ユーモアがある授業がよい	-0.139	0.088	0.631	0.094	-0.043	0.127	-0.027
Q34: 説明上手な授業がよい	0.260	-0.109	0.577	0.021	0.023	-0.046	-0.081
Q02: 分かりやすい授業内容がよい	0.035	-0.051	0.535	-0.034	0.027	-0.035	-0.036
Q20: 後輩にも勧めたくなるような授業がよい	0.092	0.003	0.448	0.112	0.007	0.001	0.060
Q09: 伝えたい、という熱意のある授業がよい	0.159	-0.003	0.407	-0.003	0.090	-0.134	0.194
Q45: 眠くならず退屈しない授業がよい	0.196	0.105	0.407	0.040	-0.071	0.037	-0.066
Q11: 専門知識以外にも学べる授業がよい	-0.005	0.086	0.305	-0.134	0.069	0.062	0.166
Q50: 教員の表情が豊かな授業がよい	0.003	-0.026	0.000	0.882	-0.012	-0.042	-0.017
Q35: 教員が笑顔を絶やさない授業がよい	-0.077	-0.100	-0.009	0.869	0.054	0.022	-0.088
Q49: 生きる力を教えてくれる授業がよい	0.127	0.036	0.013	0.424	-0.021	0.026	0.087
Q39: 教員が学生の顔をしっかりと見ている授業がよい	0.007	0.203	0.023	0.314	0.061	-0.076	0.255
Q06: 私は授業に限らず何事にも真摯に取り組むほうだ	-0.049	0.068	0.009	0.032	0.754	-0.020	-0.086
Q26: 私は授業への意欲・関心があるほうだ	0.060	0.073	-0.042	-0.030	0.712	0.017	0.050
Q36: 私は授業には積極的に出席するほうだ	0.120	-0.096	0.035	0.042	0.625	0.046	-0.039
Q59: 途中息抜きのある展開	0.083	-0.018	0.039	-0.051	0.049	0.735	-0.040
Q60: 雑談のある授業がよい	-0.087	0.013	0.023	0.048	-0.017	0.722	-0.004
Q19: 教員として威厳がある授業がよい	-0.050	-0.133	0.013	-0.036	-0.040	-0.024	0.624
Q22: 教員の褒め方や叱り方もうまい授業がよい	-0.051	-0.085	0.225	0.192	-0.081	0.039	0.424
Q37: 宿題や課題を課す授業がよい	-0.065	0.256	-0.174	-0.055	0.171	-0.030	0.359

Table 2に示した。第1因子を除き、第2因子～第7因子まで全ての因子で学生と教員、職員の授業意識に有意な差がみられた。

Table 2 学生と教員および職員の因子得点分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確立
第1因子	要因	1.05	2	0.53	0.06	0.549
	誤差	1843.33	2097	0.88		
第2因子	要因	83.13	2	41.56	50.00	0.000
	誤差	1743.25	2097	0.83		
第3因子	要因	100.22	2	50.11	62.38	0.000
	誤差	1684.59	2097	0.80		
第4因子	要因	15.19	2	7.59	8.87	0.000
	誤差	1795.29	2097	0.86		
第5因子	要因	120.29	2	60.15	82.29	0.000
	誤差	1532.75	2097	0.73		
第6因子	要因	99.62	2	49.81	70.02	0.000
	誤差	1491.74	2097	0.71		
第7因子	要因	37.82	2	18.91	26.55	0.000
	誤差	1493.82	2097	0.71		

この結果を有意差のみられた第2因子から第7因子についてグラフ化したものがFig.1～Fig.6である。グラフ上で学生、教員、職員を結ぶ線は有意差のみられたペアを示している。

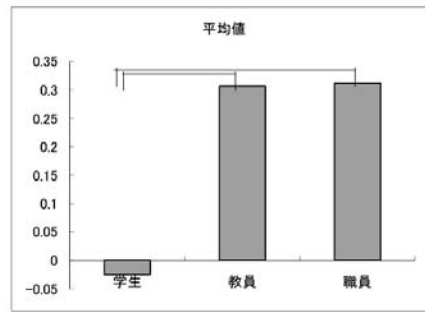


Fig. 3 第4因子(教員の親和性因子)の比較結果

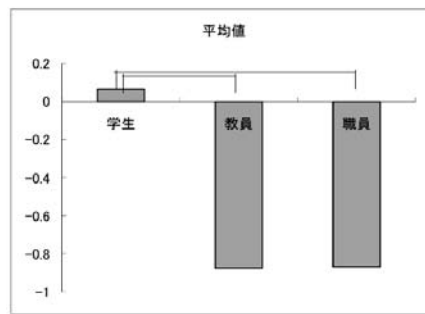


Fig. 4 第5因子(学生の受講態度因子)の比較結果

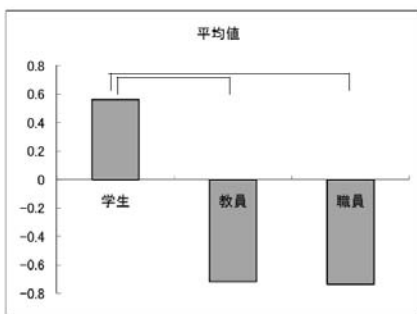


Fig. 1 第2因子(学生参加型授業因子)の比較結果

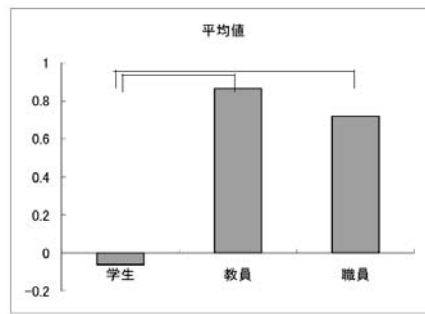


Fig. 5 第6因子(学生への配慮因子)の比較結果

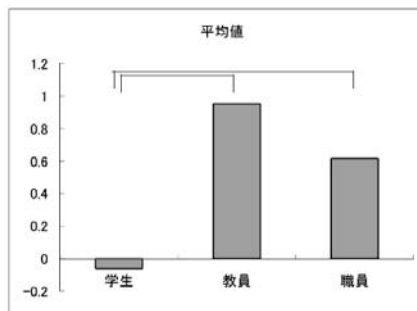


Fig. 2 第3因子(教員の熱意やコミュニケーションスキル因子)の比較結果

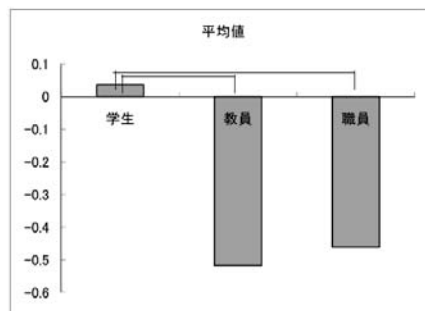


Fig. 6 第7因子(授業の規律因子)の比較結果

第1因子の『授業内容の充実因子』については、学生と教員、職員の間には差はみられず、3者共に重要視している結果が示された。しかし、第2因子『学生参加型授業因子』と第5因子を『学生の受講態度因子』、第7因子を『授業の規律因子』では、学生と教員、職員の間で有意な差がみられ、いずれも学生のそれぞれの因子得点は正であり、教員や職員の因子得点は負であり、その差は統計上すべて有意な差（ $p < 0.001$ ）であった。逆に、第3因子『教員の熱意やコミュニケーションスキル因子』と第4因子『教員の親和性因子』、第6因子『学生への配慮因子』については、学生のそれぞれの因子得点は負であり、教員や職員の因子得点は正であり、その差は統計上すべて有意な差（ $p < 0.001$ ）であった。

V. 考 察

分析Ⅰ

全体の因子分析の結果から7因子が抽出された。これらの因子は大きく分けて、授業内容に関する因子群（第1因子『授業内容の充実因子』）と授業スタイルや形式等の授業スキルに関する因子群（第2因子『学生参加型授業因子』、第5因子『学生の受講態度因子』、第7因子『授業の規律因子』）および教員や学生の態度や姿勢に関する因子群（第3因子『教員の熱意やコミュニケーションスキル因子』、第4因子『教員の親和性因子』、第6因子『学生への配慮因子』）に大別される。これらの比較結果は分析Ⅱで述べるが、この因子分析で特徴的なことは、従来の授業評価研究ではあまり問題にされてこなかった学生の受講態度に関する因子（第5因子『学生の受講態度因子』）が抽出されたことであろう。授業を学生との相互関係から成立すると位置づけた上で学生の心理的特性を加味した田中・藤田（2003）、学生自身による自己学習成果

の評価や教員と学生の相互関係を問う評価項目を加えた調査票を作成した澤田（2008）らが指摘したように、授業の構成要素に学生に受講態度を積極的に位置づける必要があるであろう。大学授業を構成する因子として、授業内容やスタイル、形式さらには教員の態度や姿勢はよく問題にされるが、学生自身の態度も大学授業を構成する大切な要因と言うことができよう。双方向性の授業と言われるが、学生参加型のような形式に留まるのではなく、実際的な双方向のやりとりがある授業が望ましく、学生自身もそれを望んでいることが示されたと言える。これは後述する分析Ⅱにおける結果からも示されている。

分析Ⅱ

分析Ⅰで得られた各因子について、学生と教員、職員のそれぞれの群間比較を行った。第1因子の『授業内容の充実因子』については、学生も教員も職員も全てが重要と判断しており、共通した授業のイメージであることが示された。次に授業スタイルや形式等の授業スキルに関する因子群と教員や学生の態度や姿勢に関する因子群での比較結果を見てみると、学生と教員および職員との間に相反する意識の違いが顕著にみられた。

授業の形式である学生参加型授業（第2因子）や授業中の規律を求める要因（第7因子）について、教員や職員は-の因子得点であまり重視していない傾向があることが示されたが、逆に学生が授業の形式や規律などを重視していることが伺われる。この傾向は前述した第5因子『学生の受講態度因子』にも現れており、教員や職員は学生の受講態度は授業の構成要因として考えていないが、学生は自らの受講態度を望ましい大学授業の構成要因として捉えていることが示された。

ところが、これらの傾向と全く正反対の傾向が、教員や学生の態度や姿勢に関する因子群で示されている。第3因子の『教員の熱意やコミュニケーションスキル因子』、第4因

子『教員の親和性因子』, 第6因子『学生への配慮因子』等に見られるように教員や職員は教員のコミュニケーション能力やフレンドリーさ, 学生に配慮する人柄等を重要視している。しかし, 学生は大学授業にそのような教員個人の人となりはたいして重要ではない, と考えているようである。

以上のことから, 学生と教員および職員の持つ大学授業に対する意識は, 第1因子のように授業内容を重視する点では共通しているが, そのほかの因子では全く正反対の傾向を示しており, 教員や職員が持っている大学授業にとって大切と考えている因子(要因)は学生は重視しておらず, 学生が大切と考えているそれは教員や職員は重視していない, という興味深い結果となった。これにより, これからの大学授業評価は, 授業改善に結びつく評価として, 学生と教員および職員間の意識の違いを明確にした評価項目を策定する必要があると思われる。井下(2008)は授業について, 教員や教員集団の持っている意識研究と同時に学生や学生集団がどのような意識を持っているかという問題意識, さらには大学職員や保護者をも対象にした授業意識等の調査研究が志向されなければならないと述べており, 本研究で明らかにされた学生と教員および職員間の授業に対する意識の違いは, 今後の授業評価研究や授業改善研究の方向性を示していると思われる。

VI. 結 語 (今後の課題)

おりしも北星学園大学では, これまで行ってきた学生による授業評価の様式を2009年度限りとすることとなった。今後の授業評価については筆者達のあずかり知らぬところであるが, 本研究が授業改善に結びつく新たな授業評価の策定のための参考データとなるならば, プロジェクト研究として意味のあるものになると思われる。一連のプロジェクト研究

成果が北星学園大学の今後のFD研究, 特に授業評価や授業改善のための一助となれば幸いである。

本研究は北星学園大学2008年～2009年のプロジェクト研究の補助を受けており, 2009年(2年目)の研究結果発表である。感謝とともに報告致します。また, 本研究は2009年度教職部門FD研究を兼ねており, 学会資料等は教職部門FD予算において学会出張し, 収集したものであることを付記しておく。

文献

- 文部科学省大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について(2007):文部科学省高等教育局長通知(文化高第281号,平成19年7月31日)
- 夏目達也(2008):FD実施義務化が提起しているもの-諸外国との比較による若干の知見-。大学教育学会2008年度課題研究集会要旨集,38-39.
- 青野透(2008):大学設置基準における「授業の内容及び方法の改善」が意味するもの。第11回日本高等教育学会II-7部会,120-121.
- 林哲介(2006):学生参加を機動力とするFD組織化-大学教育のあるべき姿を求めて-。第12回大学教育研究フォーラム発表論文集,20-21.
- 田中每美(2006):FDの新たなトレンドと課題。第12回大学教育研究フォーラム発表論文集,22-23.
- 絹川正吉(2008):FDの今後の課題-ダイナミックス研究からの提言-。大学教育学会2008年度課題研究集会要旨集,42-43.
- 溝上慎一(2002):学生の理解の枠組みをふまえた授業展開。京都大学高等教育教授システム開発センター編,大学授業研究の構想,57-86.
- 岡部美香(2005):大学授業研究のこれから-意味生成的な知の継承の場としての大学授業をめざして-。第27回大学教育学会発表論文集シンポジウムI,25-26.
- 伊藤秀子(2008):教師と学生の主体的参加による授業改善-15年間の総括と展望-。第14回大学教育研究フォーラム発表論文集,104-105.
- 久保延恵・安岡高志(2008):優秀教員(Teachig Award受賞者)の共通点について。第30回大

- 学教育学会大会発表要旨収録, 116-117.
- 社団法人私立大学情報教育協会 (2008): 私立大学教員の授業改善白書.
- Davis, B. (1993): Tools for Teaching. Jossey-Bass. 香取草之助監訳 (2002), 授業の道工具箱. 東海大学出版会.
- McKeachie, W. (1999): McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers. Houghton Mifflin Company.
- 香取草之助監訳 (1995): 授業をどうする! -カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集. 東海大学出版会.
- 池田輝正・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001): 成長するティップス先生-授業デザインのための秘訣集. 玉川大学出版部.
- 宇佐美寛 (1999): 大学の授業. 東信堂, 166-176.
- 宇佐美寛 (2004): 第6章学生による授業評価の概念分析. 大学授業の病理-FD批判-. 東信堂, 109-146.
- 吉田雅章 (2010): 学生による授業評価は廃止すべき. 第16回大学教育研究フォーラム, 86-87.
- 松谷満・平井松牛・佐竹昌之・桑折範彦 (2005): 全学共通教育の現状と課題-学生による授業評価アンケート調査の分析から-. 大学教育研究ジャーナル, Vol2, 13-25.
- 安岡高志 (2007): 学生による授業評価の進展を探る. 京都大学高等教育研究 Vol13, 73-87.
- 田実潔・竹原卓真 (2008): 学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究-学生が望む授業づくりに向けて-. 北星学園大学社会福祉学部論集, vol45, 37-43.
- 田実 潔 (2008a): 学生による授業評価と授業改善-学生評価の再分析から-. 第30回大学教育学会発表論文集, 106-107.
- 田実潔・竹原卓真 (2009): 学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究 (II) -学生が望む授業づくりに向けて授業評価アンケートの分析から-. 北星学園大学社会福祉学部論集, vol46, 65-72.
- 田実潔・竹原卓真・鈴木剛・岩本一郎・古谷次郎 (2010): 学生による授業評価に基づいた授業改善への探索的研究 (III) -学生が望む授業づくりに向けて授業評価アンケートの分析から-. 北星学園大学経済学部北星論集, vol 49 (2), 1-16.
- 田実潔 (2008b): 教職志望学生が求める大学授業. 日本教師教育学会第18回研究大会発表論文集, 112-113.
- 田中あゆみ・藤田哲也 (2003): 大学生の達成目標と授業評価, 学業遂行の関連. 日本教育工学会論文誌, vol27 (4), 397-403.
- 澤田忠幸 (2008): 学生の自己学習評価としての総括的授業評価の活用. 第14回大学教育研究フォーラム, 94-95.

[Abstract]

**A Study of the Attitudes of Students, Faculty,
and Administrative Staff toward College Classes (I) :
Results of a Survey of the Three Parties (An Overview)**

Kiyoshi TAJITSU
Tsuyoshi SUZUKI
Ichiro IWAMOTO
Jiro FURUYA
Takuma TAKEHARA

Do college students, faculty members, and administrative staff have the same image of an ideal college classes? That question led to conducting of a questionnaire with people in these three groups. Factor analysis (Windows edition of SPSS) was used to analyze the results based on seven factors including "Class Content," "Class Style and Form," and "Student and Teacher Attitudes toward Class." Both students and teachers highly valued the content factor. However, students put more value on the style and form factors than faculty and administrative staff. In contrast, attitude was esteemed by teachers and staff members but not so much by students. The results of this survey showed that students and faculty/staff members have different opinions on an ideal college class. Further research on the differing opinions toward college classes needs to be conducted.